

**[文献紹介] 玉田勝郎著『子どもとかかわる思想 :
教育における詩情と哄笑』**

著者	田中 欣和
雑誌名	教育科学セミナー
巻	19
ページ	54-54
発行年	1987-12-10
URL	http://hdl.handle.net/10112/00019507

文献紹介

玉田勝郎著

『子どもとかかわる思想』

— 教育における詩情と哄笑 —

(明治図書、1987年2月刊 1,400円)

何年前だったか、学生たちといっしょに飲んでいる場(天五の“でいご”だったと思う)で、玉田さんが「やっているのは<子育て>の研究と大声でいっていたという記憶がある。民俗学から借りた<産育>などということばが今のように流行するよりはかなり前だった。今ならどう表現されているのかは知らないが、私の受けとめでは玉田さんの関心の焦点は<子育て>や<産育>というより<子育て>論なのだ。さらに深読みすれば、戦後初期の兵庫の農村で育った自身の少年期や今なお多分に保有する自身のなかの少年性へのいとおしみが、玉田教育論(教育批判論)の底にあるようだ。そういう玉田さんのいいところが表現されているのが昨年出版されたこの本である。もとになっているのは、すでに雑誌等で発表されて来た東井義雄論や福地幸造論、恩師と自らの交流の記でもある小西健二郎論、学校文化批判、生活綴方論などであるが、それぞれ手直しされた上で一巻にまとめられて見ると玉田さんの世界はたいへんわかりやすくなっている。章の配列もなるほどと思わせるのだが、せっかちな読者ならどの章から読んでもいい。

今の学校教育がドウショウモナイとなげかせるものになっているのは明らかだし、それが高度成長期以来の諸変化(玉田さんの表現では<「生態系」の変容ともいうべき様変り>)によって生活のなかにあった教育的諸力が衰え、それに代わって学校の「単線かつ脱色の機能」の肥

大化という過程であったことは、たしかに多くの人々によって指摘されて来た。しかし、玉田さんが切りかえそうとしているポイントは、その<なげき>のおちこんでいるまさにその場所なのだ。国家主導の教育論議は「深刻ぶった顔で、陰気・陰湿な対策」をふりまわし「教育から詩情と哄笑をいっそう奮い去ろうとしている」が「それにもまして問題なのは、それを批判する側の人々もまた、自ら深刻ぶった顔で、子ども不在の、陰気な論調へとおちこんでいる事態である。」というのである。

そこで…喚起力として子ども存在の解釈に努めて来たものとして、生活綴方教育等の運動の最良の部分を検討し直し、「教える」教育の肥大化を批判し、「体制」派も「批判」派も結果的にはよってたかってそれを肥大化させるものになっている教育論議の構造を示唆するものになっているのが本書である。肉厚の教師たちの営みから学んで、その諸事実に媒介されているだけ、イリッチ風の学校批判より説得的である。

しかし、それにしても「われわれは、共同体の『素焼の肌が放つ光』の再生なしには子どもの『いのち』にふれていく教育実践はなし得ないのだろうか」という問いを著者と共有した時、……読者にとっての問題はそこからはじまるであろう。その<問題>の座標測定のために、本書は一つの次元を付け加えてくれるであろう。

(田中 欣和)